

「教育をめぐる虚構と真実」

そろそろ入試の季節だ。この時期になると、どれだけの生徒が理不尽な振り分けで苦しんでいるのかと胸が痛くなる。そんな循環を断ち切るべく、民間人校長をはじめ、「ゆとり教育」の推進者、いじめ、学力、教科書検定、法改正のエキスパートによる鼎談を一冊にしたのが本書だ。

そもそも「ゆとり教育」は、八〇年代に激しくなった対外貿易摩擦がきっかけだという。良質の製品を安値で提供する日本の労働の根っこに、過剰な長時間労働の実態を見た外国が変革を要求した。それによりまず教師など公務員が週休二日となり、カリキュラムや学級編成は文科省の大枠内であれば校長の裁量で自由に変えられるようになった。出発はどうあれ、校長の権限強化をプラス面と受け止め、「よなか」科を軸に教育実践を行ったのが藤原和博氏である。

だが宮台真司は言う。多くの校長は権限を管理強化に使い、保守的で昔ながらのスタイルを続けるだけだった。改善すべき点はわかっているのに手をつけず、反対にせっかくの良い面はなし崩しの否定する一貫性のなさ。つまりとらえどころ六つの鼎談から見えてくるのは、そんな「日本人」とは何かといふことだ。

いじめの被害者救済もまったなし

鼎談に映る「日本人」とは何か

神保 哲生ら著

だ。「自殺」という形でメッセージを送るのは、圧倒的集団の中で個が無力化されている証拠だとゲストの内田朝雄氏は指摘する。そのために学校の生活空間自体を変え、シカトやクスクス笑いといったコミュニケーション操作系のいじめを無意味化することが急務だと。それに対し、積極的な司法と警察導入により即効性を導こうとする宮台。忌憚ない議論が進められていく。

「あとがき」でその理由がわかった。これは広告をとらず会費のみで運営されているインターネット放送「ビデオニュース・ドットコム」(神保哲生代表)を活性化するためのものだ。既に新しい媒体で深い議論が始まっている。なるほどと納得しつつ、勇気をもらえ一冊だ。

評・宮本誠一(NPO法人夢屋プラネット代表)



春秋社・1890円